

続・吉田宗恂とその周辺 ―コンピュータと図書館を活用して― 時慶記のキリシタン(3) 曲庵と呼ばれた人々

島野達雄

『時慶記』の記主・西洞院時慶の墓^[1]は、キリシタンとなった曲直瀬道三（一溪）と同じ浄土宗の十念寺にある。ここでは前稿に引き続き、時慶が慶長 10 年に十念寺に廟堂を建てた「曲庵・同彦蔵」を検討する。

また『寛政重修諸家譜』にもとづき、吉田宗忠に曲庵と呼ばれた四男がいたことを明らかにし、数学者吉田光由の曾祖父・六郎左衛門の弟または六郎左衛門その人であることを示す。

最後に、慶長 7 年に 7 回忌を迎えた、つまり慶長元年に亡くなった曲庵は、若狭出身の医師・養方軒パウロ、または日本二十六聖人の一人、46 歳の「医師のフランシスコ」に比定でき、新在家の曲庵は、ながく京都に滞在した日本人修道士・ヴィセンテ洞院と考えられることを示す。

1. 誓願寺境内にあった十念寺

現在、寺町今出川上ルにある十念寺は、永享 3 年（1431）足利義教が新京極の誓願寺内に開いたとされる。天正 15 年（1587）、19 年（1591）の『時慶記』は、誓願寺と十念寺を併記している。

齋ニ宗永呼、予法談参候、同誓願寺、又十念寺墓所へ参候（天正 15.2.22）

誓願寺・十念寺へ参候、道三（正紹玄朔）礼ニ来儀、樽代二十疋被返候（天正 19.閏 1.2）

及晩、誓願寺・十念寺へ詣候、則廟参（天正 19.3.21）

十念寺が誓願寺から分離し、現在の地に移転したのは、天正 19 年（1591）3 月 21 日以降であろう。曲直瀬道三（一溪）は文禄 3 年（1594）1 月 4 日に亡くなっており、墓石は現在の十念寺にある。つまり十念寺の移転は、天正 19 年 3 月から文禄 3 年 1 月のあいだに、おこなわれたと考えられる。

時慶の実父・安居院僧正覚澄は、天正 15 年（1587）6 月 25 日条に「直に誓願寺へ参、亡父墓所へ参」とあり、誓願寺・十念寺に葬られたと判断できる。

また毎日のように「見廻（見舞）」におもむいた時慶の老母（法名寿溪）は、慶長 7 年（1602）4 月 8 日条に「花を仏に供、寿溪七回忌の為志」とあり、慶長元年（1596）に亡くなっている^[2]ことがわかる。慶長 18 年（1613）5 月 25 日条には、「十念寺に詣でると、不思議なことに寿溪の石塔がなくなっていた」と記されており、十念寺に葬られたことがわかる。

このほか十念寺は、後陽成天皇皇子の高雲院、創建者の足利義教をはじめ、医師の施薬院全宗、絵師の海北友雪の墓所として知られている。

また、高節・洞雲院^[3]（慶長 7.7.5）、宗林（慶長 10.7.9）、理安^[4]（慶長 18.5.24 七回忌）の廟が十念寺にあると『時慶記』は記している。

2. 津軽家の曲庵彦蔵

前稿で、慶長 10 年（1605）4 月 27 日、「十念寺に曲庵・同彦蔵廟堂を立、石塔同」と、時慶が曲庵および同彦蔵の廟堂を作ったことを紹介した。この「同彦蔵」は、「同じ曲庵の彦蔵」と解釈せざるをえない。彦蔵は「曲庵」の関係者だったのであろう。

彦蔵がキリシタン大名・津軽信建の長男と考えられる^同ことは、下記の一連の記事からわかる。彦蔵は、家康に陪侍する吉田宗恂とも交際があったようである。

津軽宮内（信建）へ行、枸杞酒樽二、内儀へ焼物、大貝一遣、彦蔵ニ扇子十本、彦左衛門尉（信建ノ右筆）ニ五本遣候（慶長 7.3.21）

津軽彦蔵ヨリ意安（吉田宗恂）下向候様ニト預状、其通留守へ申遣候（慶長 7.5.12）

津軽宮内夫婦へ蓮飯サハ（鯖）遣候、又五加酒・桶樽二遣候、彦蔵ニ蓮飯同（慶長 7.7.10）

津軽へ遣使者、又棒庵（下津宗秀）へモ申遣、其後彦蔵ヨリ小三郎使（つかい）に来、遣状、…津軽宮内ヨリ梨地金貝の鎧被贈、乍斟酌留置（慶長 7.8.5）

時慶の娘の糸（いと）と彦蔵との婚儀は、津軽信建が国元に帰る直前におこなわれた。

津軽宮内暇乞（いとまごい）ニ出、振舞丁寧也、錫ノ香箱ニ焼物・樽二・枸杞酒也、内儀へ沈香三両、同襪（たび）三足、内儀ヨリ宮内へ杉原十帖・水引三十把、少納言（時慶息の時直）ヨリ宮内へ革襪二足、同内儀へ杉原十帖・錫ノ盃二ツ、同彦蔵へユ（弓）懸一具、予方ヨリ彦蔵へ帷子一、内儀ヨリ錫ノ棗（なつめ）一・香箱一、予ヨリ革襪一足、右筆彦左衛門尉ニ、小宰相ニ一足、竹ニ一足、小三郎ニ布一端遣候、…夕ニ津軽宮内、此亭へ糸同心ニテ来入、盃ニテ祝、謡アリテ被立（慶長 7.8.6）

この年の 12 月、時慶は津軽家へ手紙と贈物を送る。

津軽へ状共認返事候、密柑二百・枝柿百下候、宮内（信建）へ、又内儀へ二通、左馬助（津軽建広・信建・信枚の義兄弟）へ一、彦蔵へ一通、筆一對・墨二丁遣候（慶長 7.12.5）

津軽宮内（信建）ヨリ有便宜、…糸・彦蔵何（いずれ）モ息災由候（慶長 8.1.24）

便宜（べんぎ）は、手紙や贈物などを預かって届けてくれる好都合な旅行者、好便（こうびん）のこと。ここでは、時慶のむすめの糸と彦蔵の夫婦が無事に過ごしていると、津軽信建から連絡があったことを言っている。

翌年 7 月には、海蔵寺という津軽藩の僧が運んできた手紙の返事を、時慶から彦蔵夫婦へ出した。

津軽僧海蔵寺ト号洞家（どうか・家中）也、…対面シ可馳走候間、逢候、酒・干飯ヲ進テ返シ候、又国ヨリノ文ノ返事、彦蔵方へ斗遣候（慶長 9.7.23）

半年後、彦蔵の「不慮の死去」を伝える早飛脚が時慶邸の門をたたく。

津軽宮内ヨリ預飛脚、同左馬助（津軽建広・信建・信枚の義兄弟）ノ状等在之、彦蔵不慮死去ノ由候（慶長 10.4.2）

4 日後、具足を商う一介（いちすけ）が津軽為信（信建・信枚兄弟の父親）の使いとして、また夜には、おそらく津軽藩の京都駐在員であろう山田助左衛門がやってくる。

具足屋ノ一介，津軽右京亮〔津軽為信〕ノ使ニ来，彦蔵事被申，盃ヲ進，…山田助左衛門尉来，夕食申付候，彦蔵事申聞（慶長 10.4.6）

津軽為信の使者として彦蔵の事を伝えた具足屋の一介は，慶長 10 年（1605）6 月 25 日には，「津軽右京〔為信〕家の義に一介籠者之由候」と捕らわれている。

なぜ一介が逮捕されたのか，なぜ彦蔵が不慮の死をとげたのか，津軽藩で何があったのか，時慶の娘・糸はどうなったのか⁶⁾，具足屋一介や山田助左衛門が伝えた内容を時慶は何も記していない。

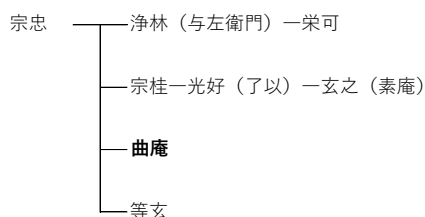
かくして，はやくも 4 月 22 日，時慶は曲庵と彦蔵をとむらう廟堂の建築に乗り出す。

廟堂申付候，曲庵・彦蔵為菩提也，…十念寺へ詣，曲庵廟所縄張候（慶長 10.4.22）

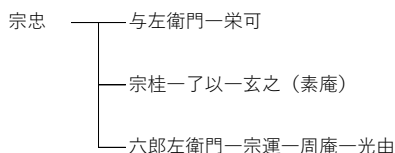
この記事は，「曲庵（A）と彦蔵という二人の人物が最近亡くなり，かれらの菩提をとむらうために曲庵（B）の廟所を作りはじめた」と解釈できる。

前稿では，摂津中嶋に「曲庵」という宿泊可能な施設があり，曲庵はキリスト教の教会ないし集会所を意味すると同時に，その教会・集会所の代表者を指したのではないかと推論した。ここでの曲庵（A）は慶長 10 年（1605）の春頃に亡くなったキリスト教の教会・集会所の代表者（または信徒），曲庵（B）は教会・集会所を意味しているのではないだろうか。

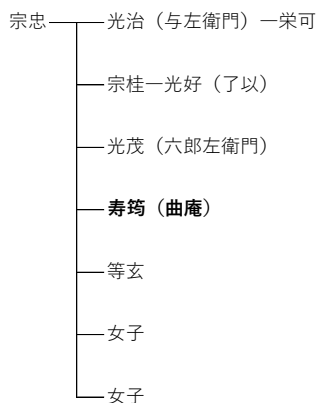
【寛永諸家系図伝（略図）】



【角倉源流系図稿（略図）】



【寛政重修諸家譜・巻427（略図）】



3. 曲庵と呼ばれた吉田宗桂の兄弟

徳川家光の命で寛永 18 年（1641）に諸家の家譜を集め，林羅山が編纂にあたった『寛永諸家系図伝』には，吉田宗忠（延徳 3 年（1491）－永禄 8 年（1565）．生没年は『寛政重修諸家譜』巻 427 による⁷⁾）の子として，浄林・宗桂・曲庵・等玄の四人があがっている。曲庵と等玄の子孫は記されていない。

延宝 9 年（1681）に光玄（みつはる）⁸⁾が父・吉田光由の略伝を記し，貞享 4 年（1687）にそのほかの一族の系譜をまとめた『角倉源流系図稿⁹⁾』では，宗忠の子は与左衛門・宗桂・六郎左衛門の三人である。吉田光由の名はこの『角倉源流系図稿』にあらわれる。すなわち，光由の曾祖父が六郎左衛門，祖父が宗運，父が周庵となっている。

さらに寛政年間に蒐集・編纂し，文化 9 年（1812）に完成した『寛政重修諸家譜』巻 427¹⁰⁾では，宗忠の男子は，光治・宗桂・光茂・寿筠・等玄の五人である。光治には，「与三郎．与左衛門．号浄林．別に家を起し，子孫吉田笹之助宗質がとき断絶す」と説明がついている。

宗桂（永正 9 年（1512）－元龜 3 年（1572））には、与次・意安などの別名とあわせて、策彦と二度渡明したことなどを記している。

光茂には「六郎左衛門」とのみある。

寿筠（じゅいん）には「曲庵。出家して京師龍安寺の養花院の住職となる」と別名「曲庵」が付されている。

加藤正俊「角倉氏と竜安寺－伯蒲慧稜とその出自をめぐって」^[11]によれば、曲庵として知られる寿筠は宗忠の四男で、道号・松嶺をもち、松嶺寿筠と呼ばれた。なお、『時慶記』には松嶺寿筠とは別人の、禅昌寺住職・有和寿筠 が登場する^[12]。

五番目の等玄には、『寛永諸家系図伝』と同様、子孫が記されず、説明もない。

その下の二人の「女子」には、姉のほうに「京師東寺の執行栄忠の妻」、妹には「尼となる」と書いてある。

『寛永諸家系図伝』と『角倉源流系図稿』から判断すれば、「曲庵」は吉田光由の曾祖父・六郎左衛門が該当する。

『寛政重修諸家譜』の「曲庵（寿筠）」は、六郎左衛門の弟にあたる。

「曲庵（寿筠）」は六郎左衛門なのか、その弟なのか、三つの家譜からだけでは判断できない。（「ベイズ統計による t 分布の区間推定」など各人の生没年の推定は、今後の課題である）

4. 消された光由の存在

了以については、『寛永諸家系図伝』に、「光好。後にあらためて了以と名づく。はじめよりあへて信長・秀吉につかへず。弟宗恂、東照大権現（家康のこと）の幕下にあり。かるがゆへに出（いで）て拝謁したてまつる」とある。同じく弟・宗恂は「父（宗桂）の業を継て、姓名をしらる」と著名人であった。

『寛政重修諸家譜』巻 428 では、「光好。与七。剃髮号了以。吉田意安宗恂が長男。母は中村氏。医家たりといへども、父祖の業をつがずして算術地理を学び、其道に通達す」と吉田光由と混同している。光由の子・田中光玄が光由について『角倉源流系図稿』で「姓名を都鄙（とひ）に知らる」と書いているにもかかわらず、了以と光由を混同しているのである。

吉田光由は寛政年間には、『塵劫記』の諸本の例をあげるまでもなく、そうとうな有名人であったと言える。吉田角倉家が幕府に呈出した家譜は、意図的に光由の存在を消そうとしていたのではないだろうか。

5. 薄れゆく曲庵の記憶

「曲庵」は、『寛永諸家系図伝』および、その後 200 年近い歳月を経た『寛政重修諸家譜』にあらわれ、『角倉源流系図稿』には登場しない。『角倉源流系図稿』の著者・田中光玄は、父・光由の曾祖父・六郎左衛門またはその弟が「寿筠、曲庵」と呼ばれたことを知らなかったのだろうか。むしろ光玄は、意図的に隠したのではなからうか。

キリスト教の禁制がつづいていた寛政年間には、「曲庵」の意味、つまり「キリスト教の

教会（集会所）またはその代表者（信徒）を指す」という記憶が、すでに吉田角倉家の人々から薄れていたと考えられる。「曲庵と呼ばれた伝説の人、寿筠（じゅいん）」の存在だけが、吉田角倉家のなかで語り継がれていたのかもしれない。寿筠（曲庵）が出家して、臨濟宗妙心寺派龍安寺の塔頭・養花院の住職となった^[13]のは、おそらく事実であろう。

ちなみに、林屋辰三郎『角倉了以とその子』には、「角倉家の墓地は父祖以来、二尊院だが、その信仰が浄土宗であったとする確証はない」旨、書いてある^[14]。

5. 曲庵と呼ばれた人々

本稿をまとめるにあたり、もう一度『時慶記』に立ち返って、「曲庵」と呼ばれた人々を整理しておこう。教会・集会所を指すと思われる「曲庵」はここでははぶく。

第一の曲庵は、天正 11 年（1583）、医学書『全九集』（曲庵本）を書写し、時慶を通じて山科言経に渡した^[15]「新在家の曲庵」である。この「新在家の曲庵」は『時慶記』第 1 巻（天正 15 年・天正 19 年・文禄 2 年）に頻繁に登場し、時慶が深い敬意を示している。

第二の曲庵は、慶長 7 年（1602）9 月 16 日条の「曲庵七回忌也」から慶長元年（1596）に亡くなったと判断できる「慶長元年没の曲庵」である。七回忌には十念寺の僧二人が法要をおこなっている。

第三の曲庵は、慶長 10 年（1605）4 月 22 日条「廟堂申付候、曲庵・彦蔵為菩提也」で彦蔵とともに菩提をとむらわれた「曲庵」である。この慶長 10 年春頃に亡くなったと考えられる曲庵、「慶長 10 年頃没の曲庵」は、十念寺に津軽彦蔵と合同の廟堂が設けられた。

第四の曲庵は、吉田宗忠の二男・吉田宗桂にとって弟にあたる六郎左衛門、またはそのさらに弟の寿筠（じゅいん）である。「曲庵の別名がある寿筠」は、出家して龍安寺の塔頭・養花院の住職となった、とされる。

6. 養方パウロとヴィセンテ洞院

結論から言えば、『時慶記』や三つの家譜の記事だけでは、4 人の曲庵の特定はもちろん、誰と誰とが同一人物であるかは推定できない。

しかし、西欧に残る史料から、推測することは可能である。

まず、第二の「慶長元年没の曲庵」は、永禄 3 年（1560）に京都で受洗し、慶長元年（1596）に長崎で死んだ、医師でありイエズス会の日本語教師でもあった「養方軒（Yofu, Yofogen）パウロ」ではないか。

土井忠生『吉利支丹文献考』昭和 38 年に「養方軒パウロ」の詳しい伝記がある。

一部を引用すると、「（ルイス・フロイスは）伴天連ガスパル・ヴィレラが 1560 年（永禄 3 年）將軍足利義輝に謁した後、京都に在って布教に従うや、公家武家其の他仏教徒の間に多くの信者を得たことを述べ、次に老医養方軒が転宗して、吉利支丹として活躍した模様を簡明に伝えている」。

すなわち京都の公家たちが入信をはじめた永禄 3 年頃に養方軒パウロも入信している。

そして「1592年（天正20年）には長崎に転じ、1596年（慶長元年）にその地で聖なる死を遂げた」とシュールハンマー神父が記した、と指摘している。

第二の「慶長元年没の曲庵」は、養方軒パウロのほか、慶長元年12月19日に秀吉の命令によって長崎で処刑された、いわゆる日本二十六聖人のひとり、46歳の日本人「医師のフランシスコ」とも比定できる。「医師のフランシスコ」は京都で捕縛されており、時慶が七回忌を営んでも不自然ではない。

さて、第一の「新在家の曲庵」は、養方軒パウロの子・ヴィセンテ洞院（Vicente Toin）ではないか。

『国語史への道・上』1981年^[16]のH.チースリク「イルマン・ヴィセンテ洞院」は、1593年（文禄2年）のイエズス会会員名簿には、「会員の中でただ一人、日本文学に長じ、日本語による優れた説教家である。そして今までに日本語で書かれた霊的および学問的書物の大部分を著作し、または翻訳した」との記載がある、としている。

H.チースリク「イルマン・ヴィセンテ洞院」は述べている。

曲直瀬道三の入信にあたっては、「(オルガンティノ神父は)ヴィセンテを京都へ呼び、ヴィセンテおよびコスメ両修道士に説教させ、神父自身もこれに同席した。特にヴィセンテは道三と同じく漢方医学に通じ、知識が深く雄弁家であったので、道三と話が合ったようにみえる。…道三は驚くほど深い理解を示し、教理の説明を聴いたあとで何時も二、三日反省して自分の感想を紙に書き、それを次の説教の前に修道士に渡したそうである」。

「文禄年間、…全国から大名と彼らの武将と家臣が多く上洛していたので、…イルマン・ヴィセンテの説教で感化を受けた、と特筆されている「大物」もかなり居た。まず津軽為信とその二人の息子のことである」。

ヴィセンテ洞院は、曲直瀬道三、津軽為信と信建・信枚兄弟の入信に与（あずか）って力があつた^[17]。女性では京都で女子修道会をつくったジュリア内藤をあげうる。「彼女はジョアン内藤忠俊の妹で、京都の尼寺に入っており、北政所など当時の最上級の婦人たちとも親しく交際していた」（H.チースリク「イルマン・ヴィセンテ洞院」）。

むろん「洞院」の姓は、西洞院時慶との関係をうかがわせる。

養方軒パウロとヴィセンテ洞院の父子は、イエズス会の活字本出版にも深くかかわっている。

1591年（天正19年）に刊行された日本で最初のローマ字本である聖人伝『サントスの御作業』全39章のうち、4章は養方軒パウロ、残る35章はすべてヴィセンテ洞院の手になるものである。

1606年（慶長11年）、1607年（慶長12年）2月および10月のイエズス会会員名簿によって、ながくミヤコにいたと推測できるヴィセンテ洞院は、1609年（慶長14年）にミヤコで69才の生涯を終えた。

その慶長14年（1609）以降の『時慶記』に、「曲庵」は一度も登場しない^[18]。

日本人修道士・ヴィセンテ洞院は、おそらく京都はもちろん20万人とも70万人ともい

われる全国のキリシタンの深い敬意の対象となっていたであろう。

慶長 14 年ヴィセンテ洞院が、翌慶長 15 年家康に近侍する吉田宗恂がこの世を去った。

二つの大きな支柱を失った日本のキリスト教界は、この後、禁教そして弾圧と殉教の時代を迎えるのである。

吉田光由『塵劫記』は、曲直瀬道三一溪・道三玄朔・吉田宗恂の医書と同じように、禁制下のキリシタンたちが、ひそかに誇りうる希望の星であったのではないだろうか。

江戸期を通じて『塵劫記』が売れに売れた理由には、そろばんによる日用の算法が盛り込まれていたことに加え、潜伏下のキリシタンたちの「思い」があったのではないだろうか。

-
- [1] 現在の十念寺（京都市上京区寺町今出川上ル）には、日本医史学会・日本東洋医学会・東亜医学協会の三者が平成 2 年 11 月 3 日に建立した曲直瀬道三の顕彰碑がある。筆者は十年ほど前、北野天満宮の北にある平野神社の境内に「西洞院時慶之墓」と書いた標柱があったのを目撃しているが、現在、この標柱は取り除かれている。
- [2] 文禄 2 年 7 月 14 日の生霊祭に「老母を初而焼香候」とあり、「老母をはじめて焼香候」と読めば、老母つまり時慶の実母は文禄 2 年頃に亡くなったことになるが、この記事は、生霊祭にあたって「老母をはじめとして（時慶の家族たちが）焼香候」と読むのであろう。この記事の翌日以降も老母は健在である。
- [3] 慶長 10 年 7 月 9 日条の表記は「洞雲院殿」。後陽成天皇皇子の「高雲院」を誤ったのかもしれない。
- [4] 時慶記のキリシタン(1)で、理安は「京都の南蛮寺の建設に尽力した清水リアン（松田毅一・636 頁、790 頁）の可能性があると指摘した。
- [5] 田澤正監修「古文書で見る「弘前城あれこれ」の『時慶卿記』で見る為信、信建、信枚」は、「信建の長男と思しき「彦蔵」としている。
- [6] 慶長 10 年 7 月 21 日条に「津軽小三郎来、…糸へ教訓之義共云伝（ことづて）申」とあり、次に時慶記が現存する慶長 14 年 1 月以降、「津軽糸来儀して被泊候」、「津軽糸未逗留」などの記事が慶長 15 年閏 2 月 4 日条「津（津軽糸）被帰候」まで続く。
- [7] 『寛永諸家系図伝』は吉田角倉家と親しく交際していた林羅山が編纂にあたったわりには、間違いが多く、宗忠を天文 2 年生まれ、玄之（素庵）を元和 9 年死亡などとしている。
- [8] 光由の子・光玄は田中姓。
- [9] 角倉家には安永 3 年（1774）角倉傳治による写本が伝存。
- [10] 巻 427 に宇多源氏佐々木庶流吉田の吉田巖秀を筆頭とする家譜がある。
- [11] 禅文化研究所紀要第 8 号。言経卿記に見える「新在家の曲庵」についても触れている。
- [12] 有和寿筠は禁中和歌御会（天正 19.7.4）、禁中連句御会（天正 19.9.8）に名が見える。時慶とは、数珠（文禄 2.2.21）、輿や屏風（文禄 2.3.26）、医方大成論（文禄 2.11.7）などを貸し借りする間柄であった。慶長 14 年 2 月 9 日に十三回忌を迎えている。
- [13] 『寛政重修諸家譜』巻 429 に、光治（与左衛門）の三男・周三の別名が（臨済宗妙心寺派龍安寺の塔頭の）真珠院で、「僧となり、のち医を学び、豊臣家の侍医となる。…京師妙心寺の聖沢院に葬る」とある。
- [14] 林屋辰三郎『角倉了以とその子』41 頁。
- [15] 『言経卿記』天正 11 年 8 月 13 日、8 月 24・25 日、10 月 24・25 日の各条。天正 7 年 6 月 28 日条には、安土宗論の結果、京都中が騒動となり、新在家衆が言経邸に避難したことが記されている。天正 10 年 2 月 26 日条には、「（言経が）十念寺法談聴聞、次誓願寺其外所々へ参了」とある。
- [16] この本は「土井（忠生）先生頌寿記念論文集刊行会」編。
- [17] 他に宇喜多左京亮、明石掃部、蒲生氏郷、信長の孫・織田秀則、前田玄以の二男・宗利がヴィセンテの説教によって入信している。
- [18] 刊行済みの慶長 15 年・慶長 18 年・元和 4 年の『時慶記』に「曲庵」という語は見当たらない。